

タイ人と日本人の「誘い」と「依頼」への「断り行為の意識」について

Triktima LEADKITLAX

1. 本稿の背景と目的

2008年以降のタイから日本への留学生数の急増を背景に、タイ人日本語学習者（以後、NNSと省略）と日本語母語話者（以後、NSと省略）が直接接してコミュニケーションをする機会が増加した。こういった接触場面の急増の中で、言語行動に会話上では見えない問題が生じたり、相手方の意図と異なる受け止め方をしたりする、という状況も生じているのが現状である。このようなタイと日本の言語行動上の違いは、それぞれの国の文化や習慣の違いに起因するところが多いと思われる。従って、NNSとNSがより滑らかにコミュニケーションを行うためには、両者の社会文化、相手への配慮の仕方や接触場面の意識を理解しなければならない。

多くの研究では、接触場面の「依頼」や「断り」におけるNNSの日本語使用表現を扱っているが、本稿ではその前段階の「断り行為」の「意識」について注目をした。NNSが接触場面で日本語の使用を行う背景には、NNSの個人規範や文化規範、特に母語場面と同じ規範が多く使われる。それらの規範の基には、それぞれの場面に適用される「意識」が働いていると思われる。つまり、NNSの日本語表現の選択が規範および意識に大いに関係していると思われる。そこで、タイと日本との間で、社会的文化的相違があると思われる「断り行為」、特に断り行為の「意識」について、タイ人と日本人にはどのような相違点があるかを把握するために調査を行った。

2. 先行研究

2.1 「誘い」

川口他(2002)は、待遇表現としての「誘い」は、①「相手」と一緒に行くことで「自分」にもまた「相手」にも利益がある行為を、②「自分」と「相手」が一緒に行くよう持ちかけ、③それによって「自分」と「相手」との人間関係を設定／維持／強化する行動展開表現であると述べている。「誘い」には、その表現を特徴付ける「行動」「決定権」「利益」の三つの要素に次のような特定のあり方が認められる。①「行動」は「相手」と「自分」と一緒に行く、②行為の「決定権」は相手に所属する、③「利益」は「相手」にも「自分」にもある、と述べている。

本研究の調査では、「映画への誘い」の設定をしており(4.3 アンケート調査内容参照)、この三つの要素で説明すると、「行動」すなわち、映画を見に行くのは誘った「自分」と誘われた「相手」の二人である。「相手」はこの「誘い」を受けるかどうかを自身の都合や気持ちによって決めることができるので、「行動の決定権」は「相手」にある。そして、「相手」が応じれば、「自分」も「相手」も楽しいはずであるから、行動の結果受ける「利益」は両者にあると言えるだろう。

2.2 「依頼」に関する研究

頼 (2005) の研究では、「依頼」という行為は、依頼主体が、ある「相手」に実行してもらいたいという意志があり、その「行動」を「相手」に実行させようとする行為であると定義されている。行動するかどうかを決める「決定権」を「相手」が持ち、行動する。また、「相手の行動」によって「自分」が「利益」を受けると述べている。

本研究の調査では、「スーツ借用の依頼」を設定している (4.3 アンケート調査内容参照)。この三つの要素で説明すると、「相手」に実行してもらいたい「行動」すなわち、依頼主体にはスーツを貸してもらいたいという意志がある。貸すか貸を決める「決定権」は相手にあり、相手が貸してくれると「自分」が「利益」を受けるのである。

2.3 「断り」に関する研究

蔡 (2005) の研究では、「断り」とは、承諾を期待する相手の要求を受け入れず、相手の意向に反することを実行しようとする行為であると規定している。また、権 (2008) は、「断り」とは、相手(依頼者・要求者など)の意図に応じず、断る側の領域(「自由にいたい」のような気持ちを守る発話行為)であるとしている。「断り」という発話は相手(依頼者・要求者など)との人間関係に影響を強く及ぼしやすいために、人間は普段『断り』表現を表しづらい・断る場面に接したくない」と思うかもしれない。そのために、断る側は断った後のリスクを減らし「断り」を成功させるために、依頼者との諸関係を慎重に考慮した上で、「断り」を遂行しなければならない。「断り」を行う際には、話し手と相手との諸関係には、親疎関係、年齢層の差、発話内容(依頼・要求などの内容)などが関わるであろうと指摘している。

2.4 異文化間の意識・規範に関する研究

尾崎 (2005) が対人的距離意識に関する日韓の違いを両国の市民にアンケート調査したところ、多少差が認められた。しかし、依頼と感謝の〈関係〉に関する調査では、ソウルに特徴的な傾向がみられたが、日本ではその傾向は認められなかったと述べている。タイ日の間でも同様に意識の違いがあるのではないかと推察されるが、どのようなものか調査をしてみる必要があるだろう。

加藤 (2011) は、接触場面には、①母語場面と同じ規範が使用される場合、②母語場面の規範が緩和されて使用される場合、③母語場面の規範が強化されて使われる場合などがあるとしており、接触場面においても母語場面同様の規範に基づいて会話が管理される場合があることを指摘している。伊藤 (2008) は、「依頼行為を断る時の相手に対する心理的負担を、日本語母語話者より大きく見積もるマレー語母語話者は、日本語を運用する際も日本母語話者より『断り』を具現化することに慎重になると推測される」としている。さらに、「学習者の母語と日本語の社会文化的規範が異なっている場合、ポライトネス⁽¹⁾の習得は学習環境および母語と日本語の社会文化的規範に左右される」としている。本稿はタイ人と日本人の社会文化的規範の元である「タイ人と日本人の誘い・依頼に対する断り行為の意識の相違」について調査を行う。

3. 研究の枠組み - ポライトネス理論

本稿では、Brown and Levinson (1987) (以降、「B&L」と略) のポライトネス理論 (politeness theory) の枠組みに基づいて分析を行った。

ポライトネス理論とは、社会的な人間関係の中で、円滑なコミュニケーションや人間関係を維持するために、人々がどのような言語的なストラテジーを用いるのかに関わる理論である。ポライトネスはタイ語や日本語などが有している丁寧さの言語体系、いわゆる敬語より広い概念である。言語行動的な視点で言うと、ポライトネスとは、会話の場において表現・伝達される、自分や相手のフェイスを侵害することに対する軽減的・補償的な言語的配慮のことである。

ポライトネス理論で中核を成す概念は、「フェイス侵害」FTA (Face Threatening Act) である。人間には、他人に理解や称賛をされたいというポジティブ・フェイスと、他人に邪魔されたくないというネガティブ・フェイスの2つのフェイスを保ちたいという欲求があるとしている。B&Lは、この2つのフェイスを脅かさないように配慮することがポライトネスであると操作的に定義した。そして、それぞれに相手のポジティブ・フェイスを配慮 (働きかけ) するストラテジーとし、ネガティブ・フェイスを配慮 (尊重) するストラテジーがある。

このフェイスのどちらか一方、あるいは両方を脅かすような行為をFTAと呼ぶ。FTAは、話し手と聞き手の社会的距離と、話し手と聞き手の力関係と、相手にかかる負担の度合の和で表され、負担の度合は文化によって異なるとされている (B&L 1987)。

さらに、B&Lはすべての言語行動は潜在的なフェイス・リスク (フェイス侵害の可能性) を持つ、という考え方を採用し、フェイス・リスクの大きさを3要因によって決定されるものとしている。この「フェイス・リスク見積もりの公式」は下記のように記号で表されている。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

- W_x (weightiness)** : ある行為 x の相手に対するフェイス・リスク
D (distance) : 話し手 (speaker) と聞き手 (hearer) の社会的な距離
P (power) : 聞き手 (hearer) の話し手 (speaker) に対する力
R_x (ranking of imposition) : 特定の文化内における行為 x の負荷度

つまり、ある行為 (x) が相手フェイスを脅かす度合い (W_x) は、x という行為が、ある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけるとみなされているか。そして、「ある行為 (x) の負荷度 (R)」と、話し手と聞き手の「社会的な距離 (D)」(対称的關係)、聞き手の話し手に対する「相対的な力 (P)」(非対称的關係) 3要素の見積もりが加算されて決まるとしている。

この公式の最後の要因 (R_x) については、同じ行為であっても、その相手への「負荷度」は、文化や状況によって異なるとされており、また、「社会的な距離 (D)」や「力関係 (P)」の見積もりの重みづけが各々の文化によって異なることも考慮に入られている。

4. 調査方法—アンケート調査

アンケート調査は、日本のT大学で2011年5月19日～31日、タイのR大学で2011年6月4日～17日にかけて行った。

4.1 アンケート調査目的

本稿のアンケートは、日本人とタイ人の断りに対する意識について（負担の度合いを）調べ、タイ人と日本人の「依頼」や「誘い」に対する断りの傾向を比較するためのものである。

4.2 アンケート調査協力者

収集データの対象は日本人、タイ人合わせて計213名である、日本のT大学の学部生・大学院生10代後半～20代前半（男51名、女52名）103名と、タイのR大学の日本留学経験がない学部生・大学院生10代後半～20代後半（男21名、女89名）の110名に調査を行った。

4.3 アンケート調査内容

アンケートの項目は先行研究の「依頼」、「誘い」の場面の断りの項目をもとにして選定した。また、フェイス・リスク見積もりの公式（3章参照）を、一定の「社会的な距離(D)」と「力関係(P)」にするため、話し手と聞き手の関係を「友人」と設定し、「行為(x)」だけ取り替えた。アンケートの第1～5項目は、「誘いに対する断り」の行為、第6～10項目は、「物の借用の依頼に対する断り」の行為、そして第11～15項目は、「手伝いの依頼に対する断り」の行為である。これらの項目は負担度の違いが分かりやすいように、「無料で行えること」から「高いお金がかかること」、両国の生活から想定される「身近なこと」から「あまり馴染みのないこと」まで設定した。

表1に掲げた15項目から、どの程度悪いと感じるかを被調査者に答えてもらう。悪いと思われるほど、その行為の負担の度合いが高いとする。本稿の調査回答は、0=悪いと思わない、1=少し悪いと思う、2=悪いと思う、3=とても悪いと思う、という値で統計する。これらの平均値を出し、タイと日本の断りに対する意識を調べる。アンケートには、「このアンケートは、日常生活の人間関係においてどのような行為があなたに負担をかけるのかを調査するものです。あなたは、特に用もなく、相手の誘いや依頼に応えられる状況であるという事を想像しながら答えてください」という設定をし、被調査者にアンケートに答えてもらった。

表1 アンケート項目⁽²⁾

| 意識 | 行為（友達が、あなたを・あなたに）《行為設定の意図》 |
|----------|--|
| 誘いに対する断り | 1) 散歩に誘って、あなたが断ったとき。(伊藤 2005 ⁽³⁾) 《無料で行える》 |
| | 2) 図書館に誘って、あなたが断ったとき。《無料で行える。日本では馴染みがある》 |
| | 3) 映画に誘って、あなたが断ったとき。《多少お金がかかる。両国に馴染みがある。》 |
| | 4) 遊園地に誘って、あなたが断ったとき。《お金・時間がかかる。》 |
| | 5) 海外旅行に誘って、あなたが断ったとき。《高いお金・時間がかかる》 |
| 物の借用の依頼に | 6) 本を貸してもらいたいのに、あなたが断ったとき。(頼 2005) 《無料で行える》 |
| | 7) スーツを貸してもらいたいのに、あなたが断ったとき。《無料で行え、両国にあまり馴染みがない》 |

| | |
|------------------|---|
| 対する 断り | 8) 1万円のお金を貸してもらいたいのに、あなたが断ったとき。《お金がかかる》 |
| | 9) コンピュータを貸してもらいたいのに、あなたが断ったとき。《無料で行えるが、不便になる》 |
| | 10) 車を貸してもらいたいのに、あなたが断ったとき。《無料で行えるが、不便になる。タイでは身近な事だが、日本ではあまり馴染みがない》 |
| 手伝いの依頼 に対する断り | 11) 修士論文・卒業論文の調査協力を依頼したのに、あなたが断ったとき。(祭 2005)《無料で行える》 |
| | 12) 引越しの手伝いを依頼したのに、あなたが断ったとき。《無料で行える。タイでは身近な事だが、日本ではあまり馴染みがない》 |
| | 13) 結婚式の手伝いを依頼したのに、あなたが断ったとき。《無料で行える。タイでは身近な事だが、日本ではあまり馴染みがない》 |
| | 14) 親戚のお葬式の手伝いを依頼したのに、あなたが断ったとき。《無料で行える。タイでは身近な事だが、日本ではあまり馴染みがない》 |
| | 15) 空港までの送り迎えを依頼したのに、あなたが断ったとき。《無料で行える。タイでは身近な事だが、日本ではあまり馴染みがない》 |

5. アンケート調査の結果と分析

5.1 アンケート調査結果

アンケートの結果を集計し、表にまとめた。

表2 タイ人と日本人のアンケート集計結果

| 項目 | タイ人 (計 110 名) ・ 日本人 (計 103 名) | | | | | | | | タイ人・日本人 | |
|----|-------------------------------|----|------------|----|----------|----|-------------|----|---------|-------|
| | 0(悪いと思わない) | | 1(少し悪いと思う) | | 2(悪いと思う) | | 3(とても悪いと思う) | | 平均値 | |
| | タイ | 日本 | タイ | 日本 | タイ | 日本 | タイ | 日本 | タイ | 日本 |
| 1 | 37 | 19 | 63 | 66 | 10 | 15 | 0 | 3 | 0.755 | 1.019 |
| 2 | 20 | 32 | 33 | 54 | 37 | 16 | 20 | 1 | 1.518 | 0.864 |
| 3 | 57 | 11 | 44 | 41 | 9 | 39 | 0 | 12 | 0.564 | 1.505 |
| 4 | 47 | 15 | 51 | 34 | 11 | 36 | 1 | 18 | 0.691 | 1.553 |
| 5 | 67 | 34 | 32 | 28 | 9 | 20 | 2 | 21 | 0.509 | 1.272 |
| 6 | 5 | 10 | 23 | 50 | 49 | 30 | 33 | 13 | 2.000 | 1.447 |
| 7 | 21 | 49 | 38 | 36 | 38 | 15 | 13 | 3 | 1.391 | 0.728 |
| 8 | 32 | 67 | 50 | 26 | 21 | 6 | 7 | 4 | 1.027 | 0.485 |
| 9 | 20 | 50 | 56 | 40 | 25 | 9 | 9 | 4 | 1.209 | 0.680 |
| 10 | 35 | 69 | 48 | 25 | 21 | 8 | 6 | 1 | 0.982 | 0.427 |
| 11 | 13 | 17 | 39 | 30 | 42 | 39 | 16 | 17 | 1.555 | 1.544 |
| 12 | 7 | 8 | 20 | 47 | 42 | 38 | 41 | 10 | 2.064 | 1.485 |
| 13 | 6 | 7 | 21 | 19 | 38 | 46 | 45 | 31 | 2.109 | 1.981 |
| 14 | 6 | 12 | 17 | 18 | 35 | 35 | 52 | 38 | 2.209 | 1.961 |
| 15 | 11 | 34 | 40 | 37 | 42 | 26 | 17 | 6 | 1.591 | 1.039 |

平均値の差異がタイ人と日本人の断りに対する意識の違いを表していると考えられる。さらに、図1に、両国の平均値の際を図示した。

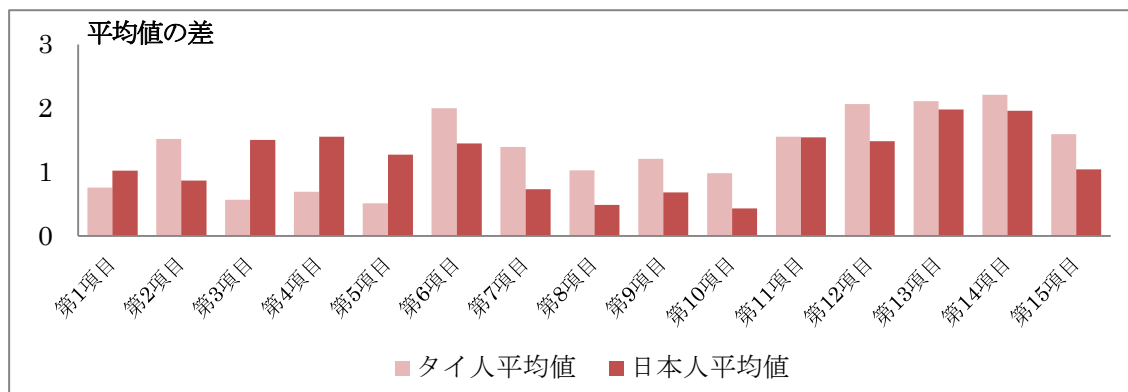


図1 タイ人と日本人のアンケート調査の平均集計結果

5.2 アンケート調査の分析結果

アンケート調査により、「断り話行為」にどのような負担の度合いがあるかを調べた結果、タイ人と日本人の被調査者は次のような順で、負担を大きく感じていると考えられる。

表3 タイ人と日本人の負担の度合いを大きく感じる順の断り

| 負担の度合い | タイ人《全体との%・平均値》 | 日本人《全体との%・平均値》 |
|---------------|--|---|
| 最も負担度の大きい行為 | 親戚の葬式の手伝いの依頼に対する断り行為《調査結果2の回答31.81%、3の回答42.27%・平均値2.209》 | 結婚式の手伝いの依頼に対する断り行為《調査結果2の回答44.66%、3の回答30.10%・平均値1.981》 |
| 二番目に負担度の大きい行為 | 引越しの手伝いの依頼に対する断り行為《調査結果2の回答34.55%、3の回答40.90%・平均値2.109》 | 親戚の葬式の手伝いに対する依頼の断り行為《調査結果2の回答33.98%、3の回答36.89%・平均値1.961》 |
| 三番目に負担度の大きい行為 | 結婚式の手伝いの依頼に対する断り行為《調査結果2の回答38.18%、3の回答37.27%・平均値2.064》 | 遊園地の誘いに対する断り行為《調査結果1の回答33.00%、2の回答34.95%、3の回答17.48%・平均値1.553》 |

また、タイ人と日本人の被調査者は次のような順で、負担をあまり感じていない（平均値が1未満のもの）と考えられる。

表4 タイ人と日本人の負担の度合いを小さく感じる順の断り

| 負担の度合い | タイ人《全体との%・平均値》 | 日本人《全体との%・平均値》 |
|-------------|---|---|
| 最も負担度の小さい行為 | 海外旅行の誘いに対する断り行為《調査結果0の回答60.90%、1の回答29.09%・平均値0.509》 | 車の借用の依頼に対する断り行為《調査結果0の回答66.99%、1の回答24.27%・平均値0.427》 |

| | | |
|---------------|--|--|
| 二番目に負担度の小さい行為 | 映画の誘いに対する断り行為《調査結果0の回答51.81%、1の回答40%・平均値0.564》 | 1万円借用の依頼に対する断り行為《調査結果0の回答65.05%、1の回答25.24%・平均値0.485》 |
| 三番目に負担度の小さい行為 | 遊園地の誘いに対する断り行為《調査結果0の回答42.73%、1の回答46.36%・平均値0.691》 | コンピュータの借用の依頼に対する断り行為《調査結果0の回答48.54%、1の回答38.83%・平均値0.680》 |

上記の二つの表を見ると、タイ人と日本人、両者ともが負担の度合いを大きく感じている行為は、「手伝いの依頼に対する断り行為」だと分かる。しかし、負担度をあまり感じていない断り行為は、タイ人は「誘いに対する断り行為」、日本人は「物の借用の依頼に対する断り行為」だと、今回の調査で明らかになった。つまり、タイ人と日本人の「依頼」と「誘い」に対する質的な断りの意識が異なっていると考えられる。これによって、NNSがNSと断りの接触場面を行う場合には、言語問題のほかに、社会文化的違いによる問題が起きると予想される。

5.3 アンケート調査によるタイ・日の断りの意識について

上記で述べたが、このアンケート調査は全15項目中、第1～5項目は、「誘いに対する断りの発話行為」、第6～10項目は、「物の借用の依頼に対する断り行為」そして、第11～15項目は、「手伝いの依頼に対する断り行為」である。これらの分類で、タイ人と日本人の意識は以下のようにまとめることができる。

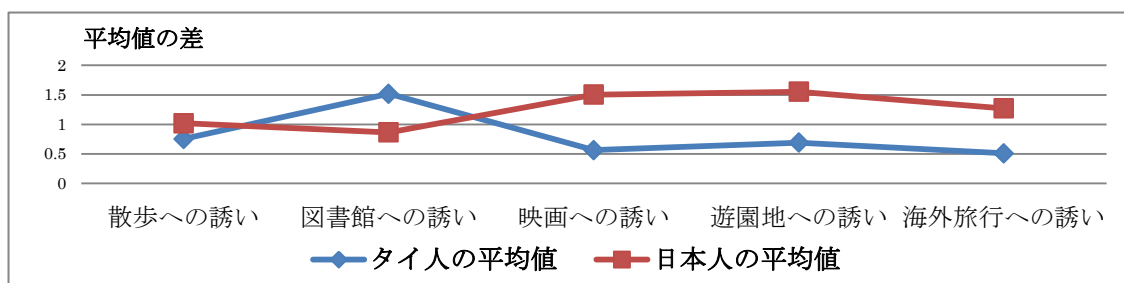


図2 タイ人と日本人の、誘いに対する断りの負担の度合い

タイ人と日本人の、「誘い」に対する断り行為の負担の度合いをみると、両者の値が大きく異なっていると分かる。まず、タイ人は、「図書館への誘い」に対して、断りを行う際に負担の度合いを一番に大きく感じると考えられる。それと比べると、他の四項目は平均値が1未満で、あまり負担を感じていないという結果になっている。

しかし、日本人は、「映画への誘い」と「遊園地への誘い」に対して、断りを行う際に負担を大きく感じており、「図書館への誘い」、「散歩への誘い」に対してはあまり負担を感じていないと考えられる。両者を比較すると、「散歩への誘い」に対する断りの負担の度合いの差があまり見られないものの、「図書館への誘い」、「映画への誘い」、「遊園地への誘い」そして、「海外旅行への誘い」に対する断りの負担の度合いの差が大きく異なっている。

タイでは「映画への誘い」、「遊園地への誘い」そして、「海外旅行への誘い」に対して断ってもあまり罪悪感を感じないと思われる。したがって、「お金がかかる誘い」を断る際にはあまり負担を感じられないようである。「お金がかかる誘い」に対する断りの負担の度合いが低いため、相手フェイスを脅かす度合いが低くなる原因ではないかと考えられる。

しかし、「図書館への誘い」は、今回調査を行った大学では、図書館を利用する際には学生証の他に、図書カードを持っていないといけないという規則があつて、そして、一週間で、一人3冊までしか借りることができない。そのため、友達に「図書館への誘い」をされたら、それは自分の図書カードを借用したい、または図書館から3冊以上の本を借りたいため自分を誘っていると感じる、とタイ人被調査者の話によって分かった。よって、「図書館への誘い」に対する断りは、「誘い」と同時に「図書カードの借用の依頼」という二重断りになってしまう傾向があるのである。日本の大学では、学生証があれば借りられることが多いため、このような二重断りだとは考えられないだろう。

次に、日本人が「映画への誘い」、「遊園地への誘い」そして、「海外旅行への誘い」に対してタイ人より断りの負担の度合いが高くなっているのは、日本人は「お金がかかる誘いかつ遊び感覚の誘い」は、仲のいい友達しか誘わないため、断ってしまうと、それは相手のポジティブ・フェイスを侵害することになると強く感じているからだと考えられる。

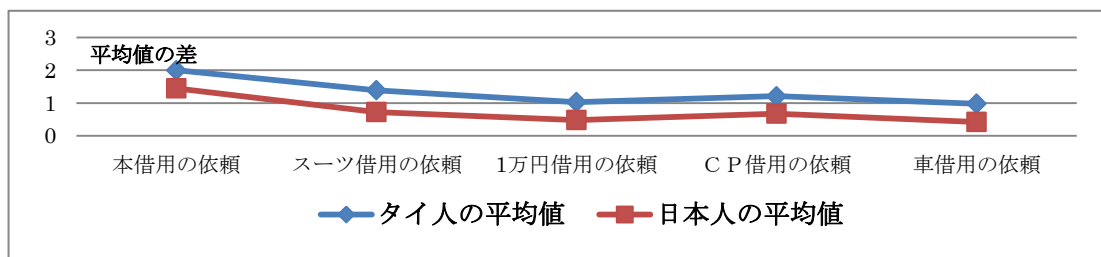


図3 タイ人と日本人の、物の借用の依頼に対する断りの負担の度合い

タイ人と日本人の、「物の借用の依頼に対する断り行為」の負担の度合いは、値が異なっているものの、傾向は同じように見られる。しかし、タイ人は日本人よりも全ての項目の断りの負担の度合いが高い。つまり、タイ人は、日本人よりも「物の借用の依頼に対する断り行為」の負担を強く感じていると考えられる。

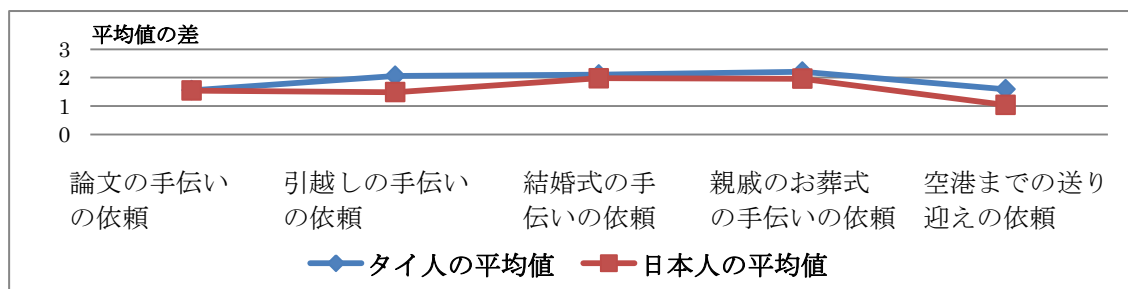


図4 タイ人と日本人の、手伝いの依頼に対する断り負担の度合い

「手伝いの依頼に対する断り行為」の負担の度合いでは、タイ人と日本人の傾向が似ていると分か

る。しかしながら、タイ人の方が、「手伝いの依頼」を断る際に負担を感じているようである。「誘い」や「物の借用の依頼」よりも負担度が高くなっているのは、お金と関係していないからだと思われる。「手伝う」という行為は、お金がなくても体力と時間があればできる行為であるため、タイ人にとっては断るのは負担度が高いと考えられる。

「引越し」に関しては、日本では引越し業者を依頼することが多いので、手伝わなくてもいい場合が多い。タイでは、業者に引越しを依頼するのはまだ主流ではなく、親戚や友達が手伝って引越しを行うことのほうが多い。よって、タイ人と日本人の「引越し」に関する意識は他の「手伝いの依頼を断る」行為の負担度よりも差があると考えられる。そして、「空港までの送り迎え」の依頼に関しては、日本人の場合、単独に行く（例えば自分で、バスや電車で空港まで行く）ことが多く、断る負担度が低くなっていると考えられる。タイでは、バンコク以外空港までには、車やタクシー、バスでしか行けないため、車を持っている友達に依頼することが考えられる。従って、日本人より、断る負担度が少し高いという結果になったと考えられる。

6. 結論

今回のアンケート調査の結果によると、タイ人と日本人が負担をあまり感じていない断り行為は、タイ人は「誘いに対する断り」、日本人は「物の借用の依頼に対する断り」であった。つまり、タイ人と日本人の「誘い」と「依頼」に対する断りの意識が異なっていると考えられる。従って、接触場面で断りを行う際には、断る側が自文化の意識のままに断りをすると異文化の話し相手のフェイスを傷付けることになりかねない。また、誘い・依頼側も異文化の話し相手の意識を理解していないで「誘い」や「依頼」を行うと、コミュニケーション上、社会文化的な意識の問題が生じる可能性が高い。よって、断りの意識に関して、タイ・日の「誘い」と「依頼」の接触場面ではより深く注意を払う必要がある。今後の課題として、日本語教育の場で「誘い」、「依頼」と「断り」の項目などに、今回の調査結果をどのように取り入れるかを検討したい。

注

- (1) 「丁寧さ」と訳される場合もあるが、体系としての敬語と混同を防ぐために、最近では片仮名で表記されているので、本稿も片仮名表記とする。
- (2) タイでは同じ内容のタイ語版のアンケートで調査を行った。
- (3) 項目1, 6, 11は伊藤(2005)、頼(2005)、祭(2005)の研究を基に設定した質問項目である。それ以外は筆者が両国の生活で想定される場面をまとめた質問項目である。

参考文献

- 伊藤恵美子 (2005) 「マレー文化圏における断り表現の比較 —ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の発話の順序に関して—」『国際開発研究フォーラム』29号 pp15-27
- 伊藤恵美子 (2008) 「マレー語母語話者の依頼に対する返答—日本語の習得過程を探る試み—」『異文化コミュニケーション研究』20号 pp1-19
- 尾崎喜光 (2005) 「依頼行動と感謝行動の<関係>に関する日韓対照」『社会言語科学』第8巻第1号 pp106-119
- 加藤好崇 (2002) 「インタビュー接触場面における「規範」の研究」『東海大学紀要 留学生教育センター』22号 pp21-40
- 加藤好崇 (2011) 『異文化接触場面のインターアクション—日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範—』 東海大学出版会
- 川口義一／蒲谷宏／坂本恵 (2002) 「待遇表現としての「誘い」」『早稲田大学日本語教育研究』創刊号早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp21-30
- 権英秀 (2008) 「『断り』表現の分析方法：フェイス複合現象紹介」『現代社会文化研究』43号 pp225-242
- 蔡胤柱 (2005) 「日本語母語話者のEメールにおける『断り』—『待遇コミュニケーション』の観点から」『早稲田大学日本語教育研究』7号 pp95-108
- 滝浦真人 (2008) 「ポライトネス入門 Politeness」 研究社
- 滝浦真人 (2008) 「ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネス—その語用論的相対性をめぐって—」『社会言語科学』第11巻第1号 pp23-38
- 都恩珍・崔善美 (2010) 「『断り』に対する『応答』の意味公式—日本語母語話者と中国人・韓国人日本語学習者の事例比較—」『桜花学園大学人文学部』研究紀要 第12号
- ネウストプニー, J.V.・宮崎里司 (2002) 『言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために—』くろしお出版
- 頼美麗 (2005) 「依頼における『お詫び・謝罪型』表現に関する考察：日本語母語話者と台湾人日本語学習者を対象に」早稲田大学日本語教育研究 6号 pp63-77
- Brown, P. and Levinson, S.C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage* (Studies in Interactional Sociolinguistics) Cambridge University Press.